

〔新刊紹介〕井上大成 ぶん・中田彩郁 え、『くさぶえあそび』（福音館書店）

前藤 薫

湯川先生の虫こぶの絵本を紹介する原稿を書き上げて、投稿しようとしていたところに、井上さんから新しい絵本が送られてきた。タイトルのとおり植物を材料にして草笛をつくり、それを鳴らせる技が紹介されている絵本なのだが、最後に虫こぶの笛が登場する。

ひと言に草笛といっても、植物の種類や使われる部位はさまざまである。アオキやヒサカキ、ネズミモチの葉を折りたたんだり、巻いたりしてつくる笛もあれば、スズメノテッポウの茎やヨシの芽、タンポポの茎にすこしだけ手を加えてつくる笛もある。

絵本の中では、お母さんと男の子が自宅の庭や田んぼ、川岸や草原、神社の境内を散歩しながら、笛の材料を見つけ、折ったり切ったりしていろいろな草笛をつくる。材料になる草木を探すところから、草笛を鳴らすまでのコツが丁寧に描かれている。絵を担当された中田さんはアニメーターさんなので人も植物もじつに生き生きとしている。草笛でメロディーを吹ける井上さんにはとおく及ばないが、私もアオキの葉を鳴らすことが出来た。

ほかにも折り込み付録には、カキノキやアジサイの葉、サザンカの花びら、ムクロジやナズナの実などを使って音を鳴らす工夫がふんだんに紹介されている。吹くだけでなく、潰したり、振ったりして鳴らす方法もある。

植物をつかった遊びから疎遠になってしまって久しいが、今でも遊びの材料は身近にふんだんにある。デジタルの世の中だからこそ、大人もそうだが、不自由なところから工夫しながら、楽しみを紡ぎだす肌感覚を養うことが、ますます大切になるのではないかと思う。

さて、この絵本の最後には、昆虫がつくってくれた

笛もふたつ紹介されている。ひとつめは穴のあいたツバキの種である。健全な種に穴を開け、中身をかき出して笛にしてもよいが、穴の開いた種が落ちていけば、そのまま笛になる。ツバキの種は小さいので音色は高く鋭い。中身を空にして、穴を開けてくれたのは、ツバキギゾウムシの幼虫だろうか。

もうひとつは、イスノキの虫こぶである。モンゼンイスアブラムシやイスノフシアブラムシがイスノキにつくる虫こぶは、大きなものでは長さが8cmほどにもなる。秋になると5mmほどの丸い穴が開けられ、多数のアブラムシが飛び出して、中身は空っぽになる。その穴に息を吹き込むと、ホーッ、ホーッとフクロウの鳴き声のような豊かな音色が響くという。

絵本の折り込み付録によれば、30年ほど前、井上さんは高知市の日曜市でイスノキの大きな虫こぶが「猿笛」という名で売られていたのを見つけて驚いたという（その当時の日曜市の様子も書きとめられて面白い）。今も猿笛は売られているのだろうか。ちなみにイスノキの別名ヒヨノキは、虫こぶに風が当たって、ヒョウ、ヒョウと鳴るからだという説があるのだそうだ。

絵本を見返してみると、草笛の幾つかがハマキガやメイガの幼虫が綴った葉に似ていることに気づいた。草笛の音はいろいろな虫の鳴き声にも似ている。昔の人たちは昆虫によるそうした造形や音色から草笛を着想したのかもしれないと思った。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)

